

近世・近代の文献に見える猿返城跡・米の山城跡

「古城考」

米の山古城

山鹿由来記に、宇野七郎親徳築之と云々、隈部式部太輔親廣、米の山鶴巣に館を築て居之云々、土俗の説に、隈部親廣在城の時、鳴津兵士來て攻之、城中水乏し、薩兵是を知て、敢て急に不攻、故城兵殆んど困苦す、親廣謀て、城外より見ゆる高場の所にて、旦暮白米をもつて馬を洗ふ事夥し、寄手数日見之、城内兵糧多く、且つ水の手多き事案外也、中々急に攻ても難陥かる城に、日數を重て無益とて、人數班せし故、米の山の城と稱すと云、

(『肥後国志』も同一内容の記載文であるが、隈部式部太輔親廣につき、親永の誤りかと但し書きがある。さらに、文末に「府より行程八里也」と書き添えられている)

猿渡古城

上長野村にあり、險阻の地也、城主隈部但馬守親永也、永禄二年、隈部親永、隈府の城に行て、赤星道雲に對話し、此般木野彌次郎親政討死し家絶えて、上知八十丁、私館に近し、某に給るべし、左も有らば田底八十丁を替地に進すべしと云へば、赤星敢て不肯して謂けるは、去る弘治二年、永野近所也とて、阿佐古宮原を乞ふに任す、又今木野を望む事、遠慮なしとて不承引、隈部大に憤り、是より赤星を可討策を運らしぬ、道雲是を傳へ聞て、逆寄すべしと相謀り、幕下の國士へ觸廻し、家人赤星中務を大手の將として四百餘人、赤星藏人を掲手の將として四百、其身は宗徒七百人引率し、永野城に押寄る、親永は、豫て期したる事故百餘人にて出向、衆寡元より敵しがたく、幸屈強の切所は、山前は古閑川を隔てて、池田村灰塚に陣を取る、赤星は大勢を引率し、米原金塚に打出、敵陣の小勢を見て心驕り、手に入れて揉崩さんも、安かるべしと荒言し、木山大森の村路に入りて憩息す、藏人は今般の戦、味方衆軍を憑んで、不虞の負有るべしと深く思ひ、四百餘人引具し、隈部が陣の向なる道場に陣を取り、夜に入ければ、兩陣烽火を焼連ぬ、翌れば五月二十一日、隈部赤星川を隔て三丁計り、隈部方より矢玉を發す赤星も放返し、抜連れて蒐る、藏人は三尺七寸の刀を振つて、多勢が中に駆入る處を、時雨のごとく放つ玉箭、藏人に中り、馬より逆に落ければ、隈部が軍士一度に瞳と突懸る、藏人が四百餘人、大將は討るれども、炎天停午汗流して漿をなし、眼暗み息喘き、二時計の戦に、寄手は悉く討死し、二十餘人に討成さる、今其所を合瀬川と云、道雲方には、此敗弊を不厭う、多勢を頼み手を不碎、徒に見物す、既に日數十餘日迄、攻撃の沙汰もなく、晝夜酒宴のみして打暮、同晦日、殊更大雨頻りなれば、彌怠り帶紐解きて、酒肴を弄し居たるを見て、隈部が入れし忍の者、如是と告しかば、親永老臣富田安藝守に命じ、夜討すべしと、相言を定め、枚を含んで、酉の刻に六百餘人、赤星が陣營に推寄せ、闇を作つて突懸る、赤星が營室は元より懶惰なりしかば、大に周章擾亂す、隈部勝に乗り、追討して首數八百餘級を得、心の外に討勝て、内浦に堡六カ所の要害を構へ、城代をこめ、永野鶴巣兩城を築き、武威國中に輝けりと云、

(『肥後国誌』には、「永野猿返城附録」として同一内容の記載がある)

「国郡一統志」

米山城

猿歸城

鶴巣城 (親)
右四所隈部但馬守鎮永居之天正年中入菊池城

「肥後國誌」(卷之七 山鹿郡 中村手永)

宮崎莊上永野村

米山城跡 山鹿由来記ニ宇野七郎親治築之云々隈部式部太輔親廣 (鶴巣家) 記 米ノ山鶴ノ巣ニ館ヲ築テ居之云々土俗ノ説隈部親廣 歎 在城ノ時島津ノ兵士來リテ攻之城中水乏シ薩兵之レヲ知テ敢テ急ニ不攻故ニ城兵殆ト困苦ス親廣謀テ城外ヨリ見フル高陽ノ所ニテ旦暮白米ヲ以テ馬ヲ洗フ】夥シ寄手数日見之城内兵糧モ多ク且ツ水ノ多き】案ノ外也中々急ニ攻テモ難陥城ニ日數ヲ重ネテ益無シト人數ヲ班セシ故米ノ山城ト稱スト云府ヨリ行程八里也

猿返城跡 永野城トモ云山鹿由来記云隈部親長所築險要ノ地也云々或記當城ハ上永野村ニアリ隈部但馬守築之在城ノ時永祿二年四月當城ヨリ六百餘兵ヲ師テ菊池郡池田灰塚ニ出張シテ敵將赤星道雲カ七百ノ勁兵赤星藏人星子中務カ八百ノ兵士ヲ追崩シ凱歌ヲ唱フ是ヨリ隈部大ニ武威ヲ振ヘリ此城跡大手柵形ノ跡城ノ礎石并若殿 親安カ事歟 ノ部屋ノ跡庭石泉水ノ跡花園ノ跡等干今歴然タリ近世此地ノ草木ヲ取レハ祟リ有トテ土人太夕怖之魑魅ノ所爲歟最モ險要ノ地也親永平日ノ所居ハ城外ニアリ館ト云府ヨリ行程八里也

宮崎莊上内田村

鶴巣城跡 隈部氏系図ニ隈部式部太輔親廣 (鶴巣家) 記 山鹿郡米ノ山鶴ノ巣ニ館ヲ築テ居之云々山鹿由来記ニ當城ハ隈部但馬守親永所築也云々赤星軍談云隈部親永永祿三年ヨリ天正五年迄十八ヶ年當城并永野城ヲ構ヘテ守拒ノ專要トス云々當城ハ矢谷ニ近ク隈部親永在城ノ頃薩軍再三進ミテ急ニ攻レ疋城郭堅固ニ防禦強ク終ニ城ヲ不拔ト云

(補) 事蹟通考編年考徵卷九天正七年ノ條ノ考按ニ云菊池傳記ニ云此年三月島津ノ將新納武藏守梅北宮内左衛門本郷能登來リテ隈部親永カ隈府城及城村永野鶴ノ巣ノ四城ヲ攻 俱ニ山鹿郡ニアリ城村ハ嫡子親安永野ハ家臣富田家治鶴東ハ幼頃亡 翌八年正月河上左京來リ加リ九年十一月迄攻レ疋一城モ落サリケレハ圓ヲ解テ引取ケル云々然レ疋其比ハ龍造寺ノ勢強ク玉名菊池山鹿山本合志五郡ノ將曹其麾下ニ属スルコトナレハ薩軍遠ク敵中ヲ經テ久ク兵ヲ隈府ニ出スコト世錄記ニモ不載之其是否考質スル所ナシ故ニ不取之云々

「肥後国誌」(卷之六 菊池郡 深川手永)

北通郡 虎口村

虎口城跡 隅部氏ノ城ト云隈部誰某ノ居城ノ跡ト云コト不分明親永カ城跡ト云ハ非也

附録曰虎口村ノ北ニ高城山米ノ山トテ城跡アリ鎮西八郎爲朝ノ城跡ト云

(補) 翁菴按ニ大友興廢記ニ天文二十年大友義鎮肥後ニ發向シ隈部彌次郎親次カ籠タル八方ケ嶽ノ城ヲ攻落ストアリ虎口村モ八方ケ嶽ノ麓ニアレハ此等ノ記ニ因テ隈部氏ノ城ト云ルナルヘシ虎口半尺兩村城跡ノ事ハ半尺村ノ條ニ補記ス

「肥後国山鹿郡村誌」 「肥後国山鹿郡上永野村」

古跡図添 猿帰城墟 村ノ艮膳鼻山ノ西山ニ拠ル 三方絶嶮只南方登ルヘシ 絶頂平地アリ長二十間幅三間夫ヨリ漸夷シテ平地アリ 其下坤ノ方堅堀切七行アリ長三十間甚不深 其下断岸 城門ハ南ニ面ス隈 部親永所築 山鹿由来記 東西十八間南北六間高五百五十六間 古記集覽肥後志 興廢年月不詳

全 隅部親永古宅趾 猿帰城ノ坤ニアリ 東西五十間南北四十間 礎石城門ノ迹等猶残レリ 表口ハ塙ヲ設クル三重 裏ハ二重ノ小塙アリ 村民親永ヲ祀ル石祠ヲ建リ 親永天正十五年七月佐々成政ニ背キテ菊池郡守山城ニ拠ル 不克シテ其男隈部親泰カ居城城村ノ城ニ走リ之レヲ守ル 成政之レヲ攻レトモ落チ十二月秀吉公ノ命ニヨリ城ヲ出テ親永ハ柳川親泰等ハ小倉ニ預ケラレ 十六年四月二十七日皆死ヲ賜フ 佐々成政事蹟考

全 米山城墟 膳鼻山ノ東ニアリ 高山ニ拠ル絶頂平地長二十一間横五間 南方下ルコト四十間甚嶮也其下東西壱丁南北三十間平坦外断岸ナリ 城門ハ坤ニ面ス 城域東西二十二間南北八間高四百間 古記集覽肥後志 隅部式部太輔武治城主タリ 専立時記ニ鶴城主トアリ 鶴城ト云ルハ當然ナラン 其孫親広ニ至リ薩軍攻之城中水乏シ 親広乃チ高丘ニ於テ旦暮精米ヲ以馬ヲ洗フ 薩軍望テ城中水多シト聞ヲ解テ班ル 因テ米山城ト称ス 肥後志土俗記 興廢年月不分明

「山鹿郡中村郷地誌調」 「第六大区六小区 上永野村」

一猿返城跡ハ膳鼻山ノ西ニ有高山也 三方ハ嶮岨ニシテ登ルヘカラズ 南一方漸ニ登ルヘシ 絶頂ニ長ニ十二間幅三間半計ノ平地アリ 是ヨリ段々下リニ平地アリ 南西ニ切岸アリ 切岸ノ上ニ堅堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス 城戸内周廻五町ハカリ也 西ノ方館迹ヨリ登リ拾三町程也城迹高二十五町計也 膳鼻ハ城迹ヨリ高キコト一町其間五町計也 南ニモ山アリ城迹ヨリ低キコト一町其間五町程也 此城ヨリ東十町計ニ米山城アリ 北二十町計ニ鶴巣城迹見エタリ 米山鶴巣ニモ此城ヨリ通フ道アリ 米山ニハ膳鼻通り鶴巣ニハ帆柱石通り也 古城考ニ曰ク猿返古城は隈部親永城主也 親永は宇野七郎親治カ子孫ニテ菊池最初の家老筋也親永以前に隈部上総介忠直 番目忠直墓ハ高野瀬村田辺ニ在ト承 と云もの有り 菊池持朝為邦重朝を補佐し文武の名を得たる人也 文明八年重朝藤崎宮に於て千句の連歌を興行し 詩歌を詠せた

る忠直も著述あり其時忠直藤崎宮草創の由来を漢字に書たる文章あり 又合志福本村八幡宮宝殿棟柱の文ハ阿佐古式部少輔武貞ニ代りて忠直自作自筆也 五山名僧詩集中ニも忠直見たりト云り 城主ハ館迹ノ条ニ弁ス

一米山古城跡ハ膳鼻ノ東ニアル高山也 絶頭ニ長二十一間横五間計ノ平地アリ 下ルコト四十間甚嶮也此下ニ平地アリ 長六十間横三十間ハカリ也 東ニ切岸ニ重西ニ切岸ニ重アリ 南北は甚嶮也 西ト南ニ城戸堀切岸アリ 城戸ノ内周廻五町程也 二ノ城戸堀切アリ 地志略ニ曰ク米山城跡ハ上長野辺ニあり 宇野親治カ築く処也 古城考ニハ城主隈部親永トアリ 専立寺記ニハ隈部式部大輔親広米山鶴巣ニ住ストアリ 事蹟考ニ曰ク大友興廢記ニ曰ク天文二年大友義鎮肥後に発行して隈部弥三郎カ籠たる八方嶽の城を陥すとあり 八方嶽城ト云ハ米山ナランカ村民伝テ曰米山城ヲ攻ラル、時米ヲ以テ馬ヲ洗フ敵見テ謂ラク此高山ニ水沢山ナリ攻落スコト難シトテ引返ス故ニ米山ト云ト云リ

一隈部館迹ハ本村ヨリ東北拾八町ニアリ 猿返城ノ下也 東西五十間南北四十間計ノ平地也 表口門迹上リ 口石段礎泉水立石等顯然残レリ 表ハ切岸高ク堀深ク外堀モ嚴重也 裏ハ堀ニ重アレトモ狭淺也 此館迹讒三百歳ノ昔ヲ見ルニ質素儉約ナルコト後世ノ奢美ヲ戒ルニ足レリ 庶幾ハ之ヲ破却スルコトナカラン 隈部氏ハ宇野七郎親治七代ノ孫持直白木須賀山ニ居館シ隈部氏ト称ス 此年文永元年 甲子 二月也ト富田系図ニ見エ 又専立寺系図ニハ式部大輔武治永野城主ト見タリ 武治父親経ノ墓蔵音寺ニアリ親経男武治其子貞明墓其子親家墓清潭寺ニアレハ武治永野居城トアルニ依ヘシ 親家男親永ハ赤星親家ト逢瀬川ニ戰ヒ又薩州及佐々成政ト隈府城ニ戰テ勇名アリ 天正十五年 丙子 十二月秀吉公ノ命ニ依テ親永ニ男親房ト共ニ柳川ニ至ル 同十六年 戊子 四月二十七日親永一族自殺スト事蹟考ニ見タリ